

剣道から学んだ礼儀と所作

香川県

小川道場

小学6年 山岡拓海

ぼくは、小学2年生から剣道を始めた。きっかけは、剣の達人が主人公のテレビを見たことだ。身のこなしが軽く、次々と敵を倒していく主人公はとてもかっこよく見えた。ところが、いざ剣道を始めてみるとテレビの主人公のようにはいかない。最初は練習がいやでいやで仕方なかった。重くて動きにくい防具、怒るとこわい先生、暑い、寒い、痛い、いやなことばかりだと思った。練習もなれてきて試合にも出るようになったけど、こんどは負けるばかりで何が面白いのだろうと思っていた。

ある日の練習の後、先生からみんなに「オリンピックになぜ剣道がないと思うか？」と聞かれた。そういえば聞かないし、考えたこともなかったが先生は、「剣道は勝ち負けを審判が決めるが、外国で生まれたスポーツみたいに当たっただけで決まるものではない。そのルールや審判を世界中が同じように判断できるようにするのが難しいからだと思っている」と言っていた。ぼくはその時はよく分からなかったが、剣道はスポーツと違うということが気にかかっていた。

6年生となった今では、剣道を含め、武道は日本でできた競技であり、文化でもあると思っている。そこには日本人としての礼儀がある。スポーツは、点をとったり試合で勝ったりするとガッツポーズをしたり、喜びを爆発させてとても盛り上がる。ところが、剣道ではどうだ。そのようなことをすると反則になり、一本取っても取り消しになると聞いた。どうしてダメなのか、先生は教えてくれた。相手を配慮する日本人としての心がないからだそうだ。また、剣道はただ技を決めれば一本になるということではない。「気剣体」という言葉がある。「気」は気持ちや気迫、「剣」は竹刀さばき、「体」は体さばき。これらが全て合わさることで初めて一本が取れる。一本を取る難しさがよく分かる。剣道は、技を決めた後の「残心」も必要だ。一本決めて「どうだ！いつでも来い！」としっかり相手に構えることだ。剣道には、相手を思いやる心と、自分を強く持つ心との両方が必要なのだと思うようになった。道場の先生や審判の先生はこれらを見て、判断してくれている。これらは武道の中でも剣道が一番分かりにくいところだと思うが、逆に日本らしいものだと思う。

そしてもう一つ、剣道で大事なものは「所作」だ。着装から立ち方、座り方、礼の仕方、そんなきよの仕方など一つ一つを先生に教えてもらっている。「礼に始まり、礼に終わる」という言葉があるが、試合や練習をする前に「大切な体をたたかせてもらいます」という意味で礼をし、「たたかせてもらって勉強になりました。ありがとうございました」という感謝の意味で礼をして終わる。先生はこれがしっかりできていないと、とても怒る。「負けてどれだけ悲しくても、どれだけくやしくても、所作は一つ一つをきちんとしろ」と。他の人の所作を見ていて、きちんとできている人は見た目が美しいし、気持ちがいい。

ぼくは、剣道に限らず、これからの生活でも礼儀や所作はきちんとしていこうと思う。それは

日本人としての特徴であり、文化であり、自分を人間として高めてくれるものだから。この大切なものを剣道は教えてくれたと思っている。